

定嗣卿山莊古蹟さだつぐきやうさんさうのこせき〔葉室にあり、今定ならず〕

著聞集 前中納言定嗣卿さだつぐは和漢の才先祖にも恥ざりければ、寛元四年の脱履のはじめより仙洞せんとうの執権をうけ給りて、

ことに清廉せいれんの聞へ有ける程に、菩提の道心の底にや催しけん、建長元年の頃葉室はむろ大納言の栖のほとりに山莊をかまへられけり。同二年八月十三日にことに引つくろひて、院撰政殿あんせつしやうどの前撰政殿大どのへ参られたりけるに、上皇御すいや有けん、女房してとゞめ仰られければ、一切にその儀なきよしを申て、同十四日の暁まうでのていにて、夜に入てかしらおろしけるに、宿執に催されて詩歌につゞりける。〔百練抄同之〕

建長第二ガヒ年余齡四十三。仲秋八月三五ノ前夜。出俗塵ヲ入ニ仏道ニ。

感懷ニシ内催。独吟ニル、外形而已。

遙尋ニテ祖跡ヲ思依然タリ。葉室草菴雲石前。願以ハテ勒王多日ノ志ヲ。博為クシテ見仏一乘ノト縁一。暁辭キシテ東洛ヲ紅塵暗。秋過レハ西山ニ白月ニ。
円ナリ。発露涙零除テキ髮ヲ。一。開ヒ花勢盛ニ觀ニ心蓮ヲ。一。長寛ノ並相遁ル名夜ヲ。清節先生掛ル官年ヲ。（新発意定然）

又

陶令亮帰休。春秋四十三。曾祖令ム遁レ俗ヲ。八月十四日。景氣逢レ境ニ。自然銘ニス肝ニ。昨仕ハテ朝端ニ何所ソ耻ル。（同）

葉室山あとは昔におよばねど入ぬる道は月ぞかはらぬ

同

極楽の道のたゞちをふみそめて都の西は心こそすめ

同